

# 日本サウンドスケープ協会 2016 年度春季研究発表会プログラム

## ○開催概要

日時：2016 年 5 月 29 日（日）10:00～13:00

会場：青山学院アスタジオ 多目的ホール（東京都渋谷区神宮前 5-47-11）

<http://www.aoyamagakuin.jp/practice/redevelopment/project03.html>

主催：日本サウンドスケープ協会

共催：青山学院大学教育人間科学部 吉仲研究室

青山学院大学総合文化政策学部 鳥越研究室

資料代：会員：無料，学生：500 円，一般：1000 円

実行委員会：箕浦一哉（山梨県立大学，実行委員長），上野正章（大阪大学），吉仲淳（青山学院大学）

## ○プログラム

10:00～10:05 開会あいさつ

10:05～11:05 一般報告 [発表形式 A]（発表 20 分+質疑応答 10 分）

1. (10:05～10:35)

サウンドマップを利用した文学教育と環境教育の架橋

報告者：小島望（川口短期大学）・大國眞希（福岡女学院大学）

2. (10:35～11:05)

イメージ構築における音の象徴作用について：物語再生装置としての音の象徴性

報告者：佐々木樹（日本大学大学院芸術学研究科）

11:05～11:15 休憩

11:15～12:45 一般報告 [発表形式 B]

3. (11:15～11:55；発表 30 分+質疑応答 10 分)

自然界の音や現象から音楽へとつなぐ音認識に関する研究

報告者：鈴木典子（カワイ音楽教室・千葉県立中央博物館）・大庭照代（千葉県立中央博物館）

4. (11:55～12:45；発表 40 分+質疑応答 10 分)

ベトナム中部高原のバナ族が聴く音風景

報告者：柳沢英輔（同志社大学文化情報学部）

12:45～13:00 総合討論

13:00 閉会

## ○発表要旨

### ◇第1報告

サウンドマップを利用した文学教育と環境教育の架橋

報告者：小島望（川口短期大学）・大國眞希（福岡女学院大学）

〈文学サウンドマップ〉は、環境教育で利用されるサウンドマップに着想を得て提示する新たな教育方法である。従来のサウンドマップは、ネイチャーゲームや環境評価ツールなど、環境の変化や、自然と人との「つながり」を意識化させるのに有効な手段として知られてきた。本研究ではサウンドマップを文学空間や海中で行なうことで、主体（個人の内面や感性）と問題を切り結ぶことを試みる。これらの実践方法を教育現場で生かすことにより、予定調和的な環境標語ではこぼれ落ちがちな指標を提示することが可能ではないだろうか。

環境学のなかで、特に環境保全の重要性を論じる際には、当該地域の自然の特異性や希少性を掲げることで社会的なコンセンサスを得る必要があった。しかし、重要なのはその地域の自然と住民との物理的精神的な「かかわり」であり、それこそが地域の自然を維持してきたしくみそのものであったといえる。本研究のサウンドマップによって描き出される「音風景」は、人の〈感性〉と環境との相互作用によって作りだされたものであり、人の奥底の意識にある自然とのつながりを抽出したものと解釈できる。さらに、この「かかわり」を明らかにすることによって、環境保全活動や地域再生、まちづくりへの応用へと視野に入れることが可能となると期待する。

本研究で行なう新たな試みである、海中で行なうサウンドマップ（＝〈海中サウンドマップ〉）は陸上で行なう場合と異なり、音の聞こえてくる方向が定位できないという点や主体の影響がより大きくなる点において〈文学サウンドマップ〉と類似・共通する部分が多く、新たなサウンドスケープ議論が期待できよう。加えて、地理学的な観点からの有効性についても論じたい。

### ◇第2報告

イメージ構築における音の象徴作用について：物語再生装置としての音の象徴性

報告者：佐々木樹（日本大学大学院芸術学研究科）

本発表は主題を「イメージ構築における音の象徴作用について」、副題を「物語再生装置としての音の象徴性」と題し、イメージにおける音の象徴性について「水」を具体例とし、象徴・記憶・物語・再生・元型をキーワードに論じていきます。

ある音が鳴り、ある音が消えていくように、象徴は場所や時代ごとに絶えず消えては形を変えては再生していく大きな物語に近いものであるという特徴を持っています。それは象徴自体と象徴のもたらすイメージが音だけに限らず、歴史的状況の産物であり特定の文化的背景でのみ理解可能なものであるということでもあります。

音の象徴性についてはその多くがユングの提唱した元型的解釈をもとに語られています。元型(Archetype)の語源はギリシア語で第一原理を表す *arche* と印象を表す *tupos* から来ています。これは人間全体に共通する第一イメージと捉えられるものでしょう。「水」であれば、「生命の源」「浄化の手段」「再生の中心」という三つが第一イメージとしての「水」の象徴的な解釈になります。

我々がこのような元型的解釈を音に結びつける時、記憶または物語を媒介にして、その音を象徴化します。ある音が「水」を想起させる時、または「水」の音があるイメージを想起させる時、我々は「生命の源」「浄化の手段」「再生の中心」という記憶または「水」を通して得られた経験の物語の再生によってある音または「水」の音は象徴化されていくのです。

音の象徴性において前者のような第一イメージ的な大きな物語との結びつきについては多くが語られていますが、そうではない個人の物語についてはあまり語られていないように思われます。本発表では「水」の象徴に関わる大きな物語と小さな物語を例として、それぞれにおける「水」の音のイメージにおける象徴性、ある音が「水」をイメージするときの象徴性を分析しながら、前提的ではない、物語再生装置としての音の象徴性とその作用について探求していきます。

### ◇第3報告

自然界の音や現象から音楽へとつなぐ音認識に関する研究

報告者：鈴木典子（カワイ音楽教室・千葉県立中央博物館）・大庭照代（千葉県立中央博物館）

一般に音楽は、狩猟での合図や農耕作業の効率化という「生活の（ある程度ひっ迫した）道具」としての中に起源があるという考え方が主流であるが、現在では文学や美術と並ぶ豊かな表現方法となった。時代が移り変わり価値観が変化していく中で、人は常に「美しい響き」の発見や、それを奏でるための楽器・演奏方法の開発をなしてきた。ここまで発展してきた音楽の歩みの、そもそもの始まりは何だったのか。

本研究では、人が自然の音を聞いて魅了されこれを模倣するなかに音楽の起源があった、さらに人は自然から得たインスピレーションを音にあらわすことに情熱を持ち続けている、という視点から、以下のような作業により、自然音と音楽の結び付きを検証したいと考える。

- (1) 明らかに自然音を取り入れて作られている、クラシックの表題音楽などを調べる
- (2) 表題音楽ではなく、作曲者も特に意図していないと思われる曲の中から、自然音の影響を感じ取ったものを集める
- (3) (1)(2)につき、元の音源や現象を推測し楽譜と比較する
- (4) 千葉県立中央博物館収蔵の自然音・動物・鳥の鳴き声などの音資料、また館内生態園舟田池において水鳥の行動を観察した記録を材料とし、実際に譜面にして作曲に用いこれを演奏する

### ◇第4報告

ベトナム中部高原のバナ族が聴く音風景

報告者：柳沢英輔（同志社大学文化情報学部）

ベトナム中部高原に居住する少数民族であるバナ族が、日常生活および生業の場でどのような音をどのように聴いているのかを明らかにすることを研究の目的とした。現地調査の結果、バナ族の間では、世代や性別を超えて特定の音に対する知識・価値観が共有されていることが示唆された。例えば、夜に鳴く牛や猫の鳴き声は村落内で悪いことが起きる前兆として捉えられていること、集会所や教会の鐘・太鼓の音は重要なニュースを知らせる音響メディアとして共有されていること、特定の鳥や蟬の声から、時間や季節を知る手掛かりを得ていることなどが明らかとなった。またベトナム戦争以後に進んだ森林伐採などを背景とする生態環境の変化により、特定の動物の声が失われていることも分かった。

バナ族は儀礼・祭礼におけるゴング合奏、竹筒琴をはじめとする多様な竹製の楽器、叙事詩、民謡など豊饒な音楽文化で知られる。それらの音楽は、西洋近代の「パフォーマンス」としての音楽ではなく、生活と密接に結びついた音楽である。したがって、そうした音楽を理解するには、音楽そのもののテキストとコンテクストを分析するだけでは不十分で、その根底にある彼らの日常の音の捉え方を明らかにする必要があるのではないかと考えた。それは人類学者の川田順造が提唱する「音文化」という考え方とも共鳴する。音文化とは、音が作り出すコミュニケーションを「音楽」という狭い枠から解放して、自然音や聴覚以外の諸感覚、身体性と関わらせて理解することに着眼点がある。

本発表では、「*Soundscape of the Bahnar*（仮題）」と題する映像作品の上映を中心に発表する。この映像作品は、生業、年齢、性別の異なる様々な人物が、好きな音、嫌いな音、村を象徴する音、生業の場で聞こえる音、記憶の音、時間や季節を知る音、失われた音等について語る内容と、生業活動の様子、音風景を組み合わせて構成した。